

# 木口木版の研究について

武 藤 完 一

## 緒 言

ひと口に版画といつても、その種類や技法も種々雑多なものであるが、ここでは凸版の一種である木口（こぐち）版画についての、ささやかな研究をかねて見ることにした。

要するに木版画の中に属するものであるが一般にはあまり発達していないように思う。外国の美術雑誌等には版画といえば、エッチングや石版画が主要な部分であるが、それにつづいて木版画の中の木口版画が、重要な部分を占めているようである。

外国の美術雑誌のスタデオなんかには、時々スペシャル、スプリングナンバーとして、一ケ年に一回位（或は二ケ年に一回位）この木版画の特集が出ているが、私のもっている書物には次のようなものがある。

◎THE WOODCUT OF TO-DAY AT HOME AND ABROAD (1927)

◎THE NEW WOODCUT, THE STUDIO SPECIAL SPRING NUMBER (1930)

この二冊の中には世界各国の版画が集められていて、日本の作家のものせられている。が外国の作品は主として木口版画である。

私が木口版画に興味をもちだした大きな主動力は、フランスで木口版画の研究をしたという、山本鼎氏の作品を見てからである。それはフランスの田舎の風景であったが、そのせんさいな仕事にひどく引きつけられた。

もちろんこの山本氏の作品以前にて、日本人として木口版画を外国で研究して帰った合田清氏（19世紀末帰る）らの作品があつたことは、その後知つたのである。

山本氏の木口版がのつているというので、北原白秋著の「邪宗門」という詩集をさがしだして、それにのつている数枚の木口版画を見たこともあつた。

とにかく私は木口版画について、何かしら心引かれる思いで集めもしたり、渴望した時代もあつたので素人芸ながら、試みることができた。

しかし木版画に対する手ほどきは、昭和7年8月に大分師範学校の主権で平塚運一氏を招いて木版画の講習会を5日間開いたときである。この時は県内の教員を主としたもので約50人程集つたものである。しかし同好者は意外に多く宮崎県からも福岡県からも参加者があつた。

もちろんこの時は主として板目木版であつたが、木口版画についても簡単な紹介があり、刃物も初めて見たのであつた。

刃物は東京で製作しているというので平塚氏の紹介で、送つてもらつたのであるが版木のツゲ材が中々手にいらなかつた。いろいろ尋ねた末、別府市の櫛屋がツゲ細工をしているのを知つて、櫛屋の手を介してとりよせてもらうことができた。

その後大分市の印判やから版材としてのツゲの木をとりよせてもらつたこともある。

きくところによると我国では暖かい地方で鹿児島県あたり（屋久島か種子ヶ島あたり）に産するというのであつた。

要するにツゲ材は目方売りで1キロ幾らといった程度で、主として官庁印や卒業証書に押された校印のようなものであるから、板目木版の版木に対して、相当高価である。

多くの認め印は、このツゲの木口版である。

それでまず手はじめに5センチ角や6センチ角のものから彫り方を練習したものである。

記事が少々前後したが小野忠重氏著の「版画アルバム」（1957年11月発行）ダヴィッド社刊の解説によると次の如くかかっている。

木口木版（こぐちもくはん）

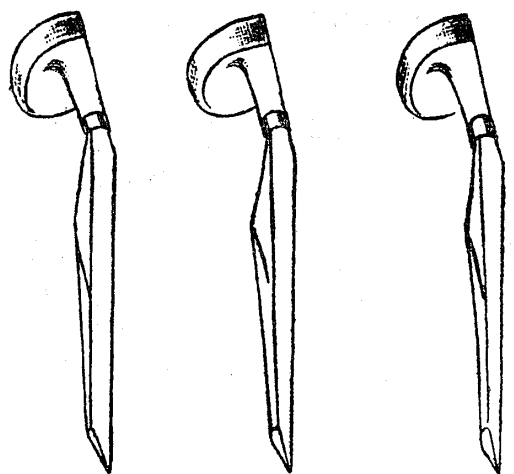
WOOD ENGRAVING (E) GRA. VURE SUR BOIS DEBOUT (F)

ツゲ、ツバキ、サクラ等の木口版木にビュランやウチのほか、網目写真製版の修整用具からこれに加わつたレンパツLINE TOOLなどを用いる。銅版画線の明暗調子表現を陰刻の白線彫 WHITE-LINE METHODであらわす18世紀末イギリスのピウイック創始の技法は、いまも主要な画面構成を保っている。量産のためには複版化する。日本には19世紀末に合田清氏がフランスから正式にこの技術を伝えた。

## 刃 物

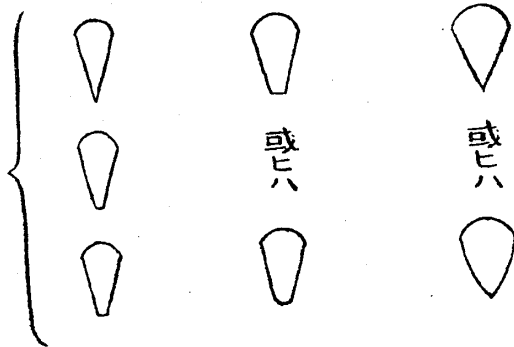
ところで木口木版の刃物は、日本版の刃物とちがつてその数が非常に多い。日本木版はほとんど切り出して線の周囲をほり、他の部分を浚いとるのであるから、切りつめていけば、切り出しと丸のみの二本でもすむのであ

I ウチ  
II アイノコ  
III ビュラン



I II III

刃面



木口木版用刃物

るが、木口木版では、黒い線をほり残すというよりは、むしろ、白い線を彫り除き、その白い線と残された黒い線との関係で、一つの調子を産むのであつて、その白線を彫るためにあらゆる巾と、あらゆる深みを持った刃物が作られている。それでその使用する場合によつて、たとえば此処はこの刃物で、ここはあの刃物で、といった風に一つの受持ちがきまつている。たとえばAの刃物では直線しか彫れない。曲線を彫る時にはBの刃物を用いる。またCの刃物では一ミリの巾の白線を彫ることができるが、もしそれ以上の広い白線を彫る時にはDの刃物を使う、といった風であるから、専門の職人は、実に数十本の刃物を前にして仕事をしているようである。

しかし私共の仕事には大体つぎのような数本があればよいと思う。

ウチ (1、2本)      アイノコ (1、2本)  
ビュラン (1本)      レンバツ (1、2本)

**ウチ** 刃の面が三角形になつていて図にある下の方のとががつた部分で彫るのであるが、その部分がとががつているものや、少し平つたく種々な巾に研いであるものなど、専門家ならば十数本必要という事である。主として直線の変化のない揃つた線を出すのに用いられる。

**ビュラン** これは直線、曲線、太い、細い自由に使える刃物で、最も便利なもの、極端に言えばこれ一本でも大体すませる場合があるといえる。

**アイノコ** ビュランとウチとの中間であるところからかくよばれた。底の巾の広い狭いによつていろいろの場合に役立つもの、底を平つたく研がずに少し丸味を持たせることも行われている。

**レンバツ** これは主として機械図のようなものを彫るに用いるものとされているが、私は非常に好きでほとんどの場合これを使つている。刃底は鋸の目ようになっていて、一度に数本の線を並べて彫ることができる。四本の線、六本、八本といろいろの数があり、その線の間隔にもいろいろある。

何にしろつげの木口は非常に堅いから刃がかけ易い。私は平塚氏の著書にもかいてあつたので手製でアイノコを作つたのであるが、それは丸い鉄棒を少し斜めに切り落した形であるが、中々よく切れるし、今までに一度も刃がかけたことがない。

**砥石** 砥石は油砥という外国産のものがいいようである。これは油をつけて研ぐのであるが、日本の仕上砥に油をつけて研いでもよい。

**バレン** 摺る時には主としてバレンを使用する。これは板目木版用のものよりも、丸い木片の中央を少しふくらませ、それを竹の皮で包んだものを作り、それを用いる。板目木版用のものでもよいのであるが、それよりもこの方がうまくいく。

**ルーラー** 又は **タンポ** ルーラーは謄写用の3センチか4センチの小さいもの。或はタンポで代用してもよい。タンポは絹布の中に綿を包んだものでエッチングの時にインクをつけるものでもよい。

**クツサン** 版を彫る時に、版木を廻したり傾斜をつけたりするに便利なように、小さい座布団の如きもの、ひじつきのようなものが入用である。但し中に綿を入れたものでは、軽いから砂を入れたものの方がよい。

**インク** 印刷するには石版用インクが一番よい。日本の墨などでは到底摺れない。線が極めて細いから埋まつてとても摺れない。

**紙** 何しろ細かい線をあらわすのであるから、厚い紙は手摺では使いにくい。最も理想的な紙は雁皮(がんび)を使う。但し普通の雁皮は、うす過ぎるので厚い方が一番よい。洋紙ならばアート紙もよい。

**版下(下絵)** 板目木版のように版下をうすい紙にかいて貼りつけるということは木口ではできない。職人は主として彫るべき絵を写真にとつて、その膜を版木に貼つて彫るとのことであるが、吾々にはそれは手間すぎるので、直接描くのがよいと思う。しかし絵が左向きにな

つて都合の悪い時は一度他の紙にかいたものを転写する必要がある。私は吸いこまない紙の如き紙に墨汁で絵をかき、版木に薄くのりをひいたものの上に裏返しに貼り、裏からバレンで擦り、すぐに紙をはがすと、その絵は版木に転写されている。それをたよりに彫ればよいわけである。

**彫り方** 私は木口木版を専門に修業したのでないから、専門的に記述は出来ないが、本格にやるには、平行線、波線、点線、渦線などを、一と通り練習するだけでも半年もかゝるとのことであるから、とても一朝一夕ではないと思うが、要するに各刃物のもつ効果をのみこみ、作品の上によく生かすことが必要で、そこに技術上の欠点がいくらあつても、よき効果と絵としての急所が握られていればそれで良いと思う。極端にいうと、どんな持ち方でも、彫り方でもかまわないから、いい版面さえできればいい訳である。

曲線をほる時には、刃物や腕を丸く使うというよりも、むしろ版木を廻すという気持ちが良い、その場合にはクツサンが大変役に立つのである。

板目の刃物と違って、木口の刃物は版木とほとんど平行に用いるのだから、そこに双方のやり口の極端な相違がある。

アイノコとビュランは、その力の入れ方によつて細くも太くも彫れる。非常に自由の利く点がうれしいのであるが、それだけに線をそろえるといった場合には反つてやりにくいものである。

木口木版を最も組織的に考えて見ると、先ず絵の最も暗いところを黒とし、最も明るいところを白とする。そうして、その中間に幾段かの調子があるとして、それを線でいくか点でいくか、またアミメ（網目）でいくか、或はその線の幅もいろいろな扱い方があり、つまりその中間の調子の取扱い方である。ハーフ、トーンの処理である。私はあまり調子の多いものより少ない方が生きると思う。また刃物からくる一つのリズムも大事なことである。もちろん、これは木口木版にかぎらずすべてのブラック、アンド、ホワイトに共通のものではあるが、とくに木口彫の場合にはつきりその働らきを見ることが出来る。

これは板目木版のあるものゝ如く、一寸した味や面白味では保てない。よほどの素描の力が必要である。むしろ板目木版だつて素描の力が最も必要であるが、時には、それをぬきにして、面白味や味で目先きを通過させることが随分あるのである。それは、絵の力でなく要するに版がもっている特殊な味や、面白味のみであるかも知れないのである。

以上述べたところの大体は、黒或いは何か他の一色の

場合としてであるが、他に色摺りの木口木版も行われている。それはつまり絵の組立てを各色に分解して摺り合せたもので、無線の色摺りはまるで石版の如き風致を持つている。木口版画は今後こういう風にも生かされるものであろう。或いは墨の線を用い、それに色を加えるやり方もいいであろうと思う。

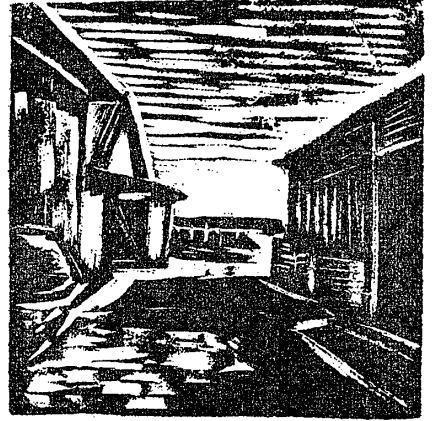
**摺り方** インキはガラス板の上か、石盤の上かへのばし、少しずつをルーラーにつけて、盤の上を縦横に、又は前後に動かし、平均に附着させ、それを版面に、やはり前後左右に廻して平均につける。あまり沢山インキをつけると、何しろ細い線の彫られた版だから、ちきに埋まつてしまう。そうでなくとも、時々ブラツシュで版面を掃除することが必要である。ことに日本紙に摺る時には目に見えぬ程の紙の分子が版面に附着し、やがては彫りの中に埋まるものである。

インキをつけたら紙をあて、バレンで摺るのであるがどんなに力を入れても木口であるから版木がいたむことはない。そして一時に紙をはがさないで、一部分のみをそつとめくつてみて、摺りが十分であるかどうかをためてみた上で、もし足りないと思れば、又かさねて摺り、十分となつてから全部紙をはがすのである。

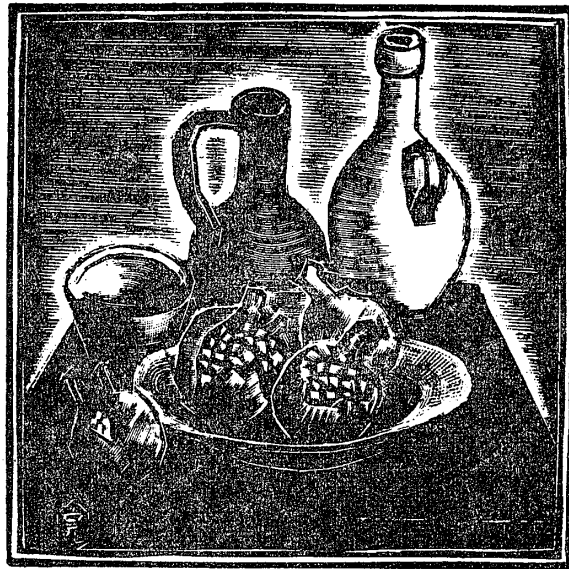
以上は貧しい乍ら私の経験で、まことにおぼろしい次第であるが、もし進んで専門的に研究される方々の多少でも参考になれば、幸甚の至りである。



(1) 龍の蔵書票 (材、さくら)



(2) 漁村 (材、ほう)



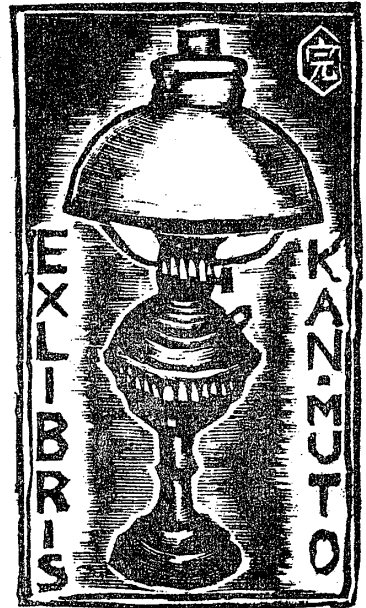
(3) 卓上静物 (材、つげ)



(4) 蔵書票 (材、つげ)



(7) 静物 (材、つげ)



(8) ランプ (材、つげ)



(5) 貝二個 (材、つげ)



(6) 梅に鶯 (材、つげ)



(9) 白椿 (材、つげ)



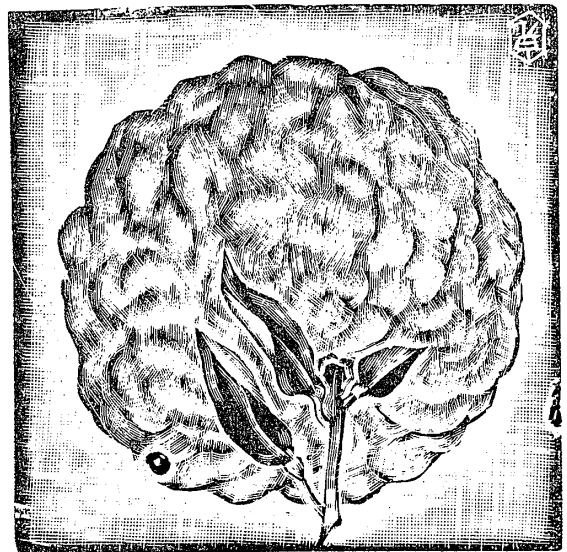
(10) 鶴と松竹梅 (材、つけ)



(12) 菜の花 (材、つけ)



(11) りんどう (材、つけ)



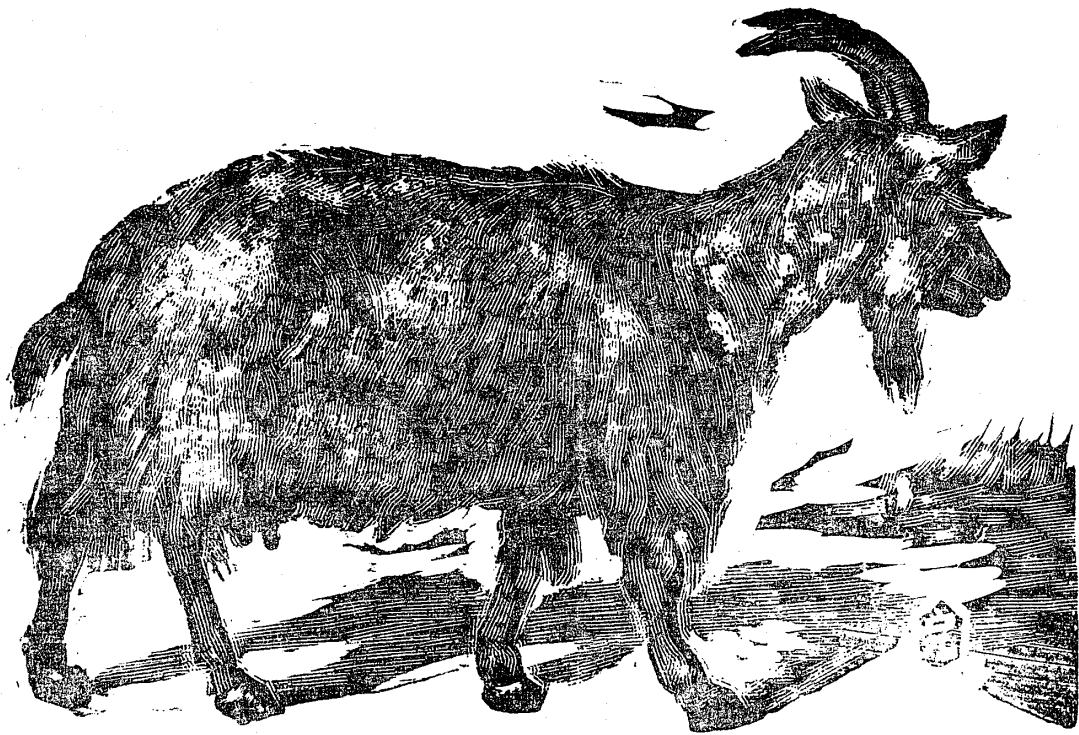
(13) 柚子 (材、つけ)



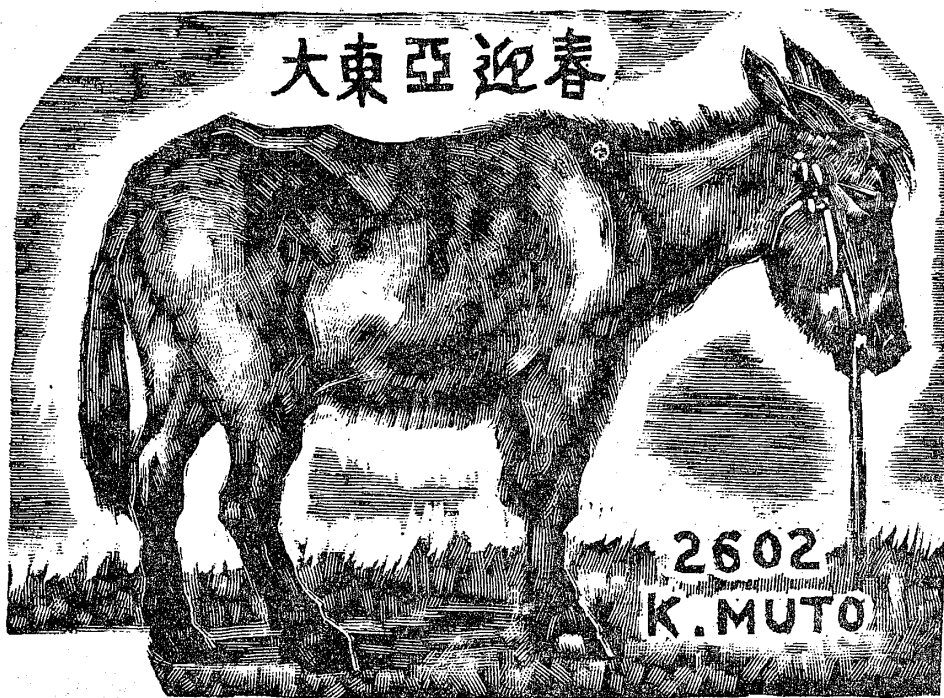
(14) 福寿草 (材、つげ)



(15) いちちく (材、つげ)



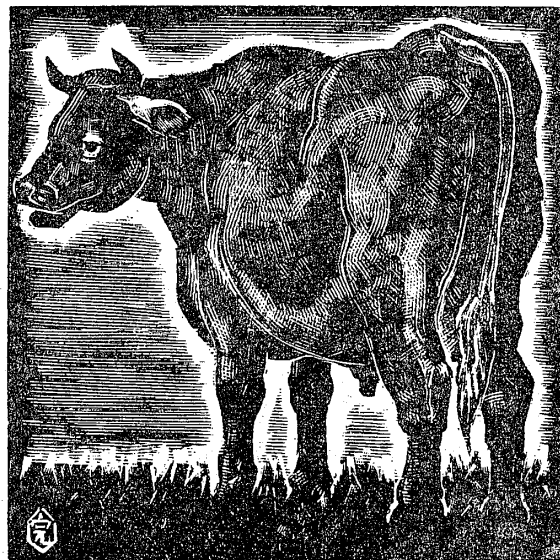
(16) 山羊 (材、つばき)



(17) ろば (材、梨)



(18) けいとう (材、つげ)



(19) 牛 (材、つげ)



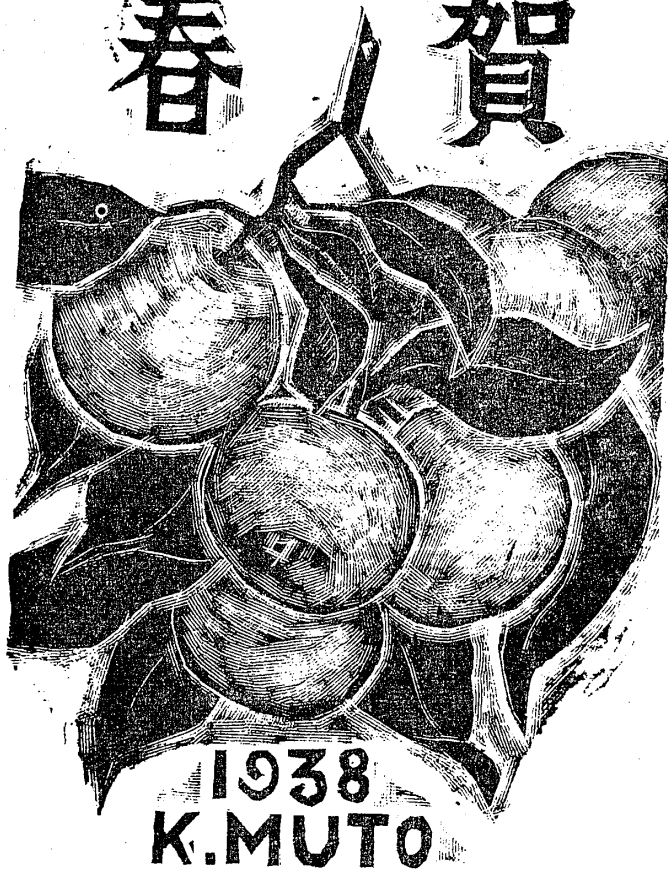


(20) 賀状 (材、つばき)

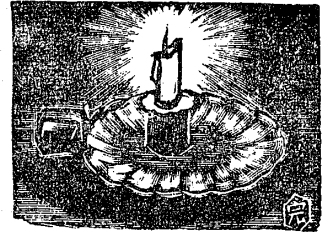


(21) ねずみ (材、つけ)

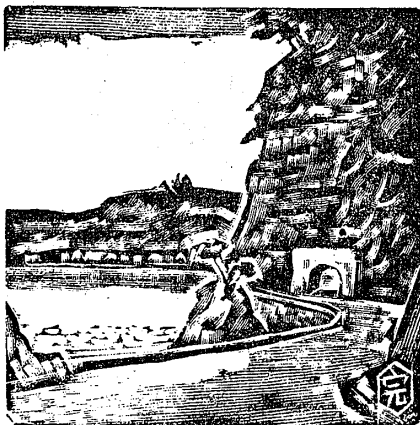
# 春賀



⑳ みかん (材、つけ)



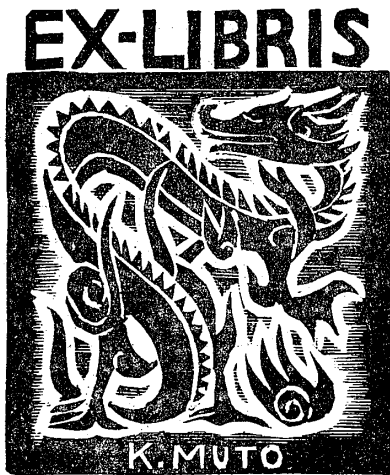
㉑ ともし火 (材、つけ)



㉒ 海辺 (材、つけ)



㉓ けいとう (材、つけ)



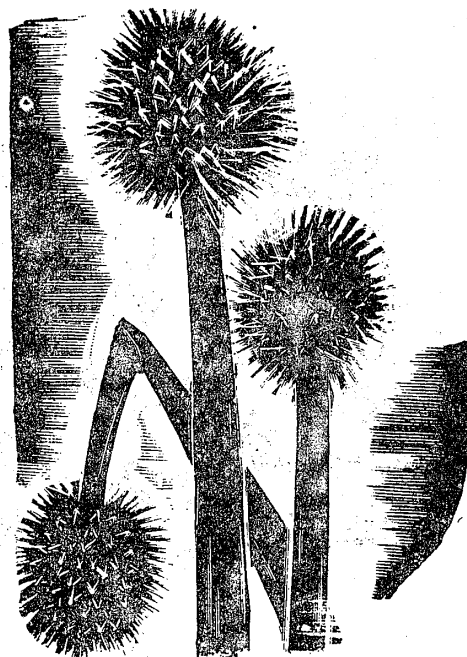
(22) 蔵書票 (材、つげ)



(23) ざくろ (材、つげ)



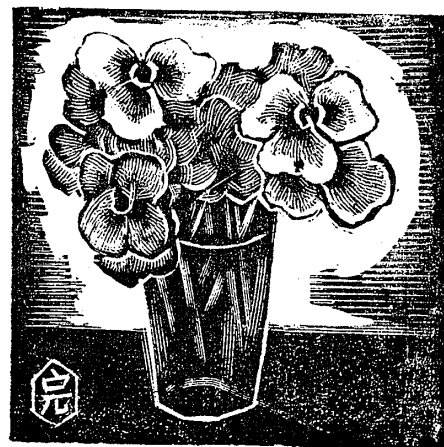
(24) 八重椿 (材、つげ)



(25) ねぎ坊主 (材、つげ)



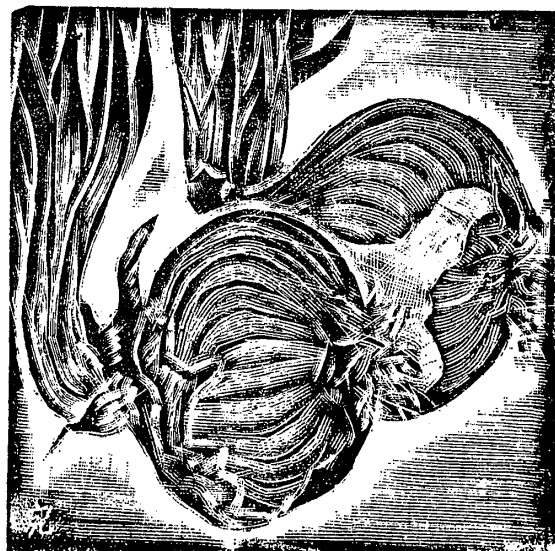
(30) 日田風景 (材、つけ)



(31) すみれ (材、つけ)



(32) もくれん (材、つけ)



(33) 玉ねぎ (材、つけ)



(34) あざみ (材、つげ)

### 木口木版の作例

- |    |             |    |           |
|----|-------------|----|-----------|
| 1  | 龍の蔵書票 (さくら) | 18 | 牛 (つげ)    |
| 2  | 漁村 (朴)      | 19 | けいとう (つげ) |
| 3  | 卓上静物 (つげ)   | 20 | 賀状 (つばき)  |
| 4  | 蔵書票 (つげ)    | 21 | ねずみ (つげ)  |
| 5  | 貝二個 (つげ)    | 22 | 蔵書票 (つげ)  |
| 6  | 梅に鶯 (つげ)    | 23 | ざくろ (つげ)  |
| 7  | 静物 (つげ)     | 24 | 八重椿 (つげ)  |
| 8  | ランプ (つげ)    | 25 | ねぎ坊主 (つげ) |
| 9  | 白椿 (つげ)     | 26 | みかん (つげ)  |
| 10 | 鶴と松竹梅 (つげ)  | 27 | 海辺 (つげ)   |
| 11 | りんどう (つげ)   | 28 | ともし火 (つげ) |
| 12 | 菜の花 (つげ)    | 29 | けいとう (つげ) |
| 13 | 柚子 (つげ)     | 30 | 日田風景 (つげ) |
| 14 | 福寿草 (つげ)    | 31 | すみれ (つげ)  |
| 15 | いちぢく (つげ)   | 32 | もくれん (つげ) |
| 16 | 山羊 (つばき)    | 33 | 玉ねぎ (つげ)  |
| 17 | ろば (なし)     | 34 | あざみ (つげ)  |